

聖書：ヨシュア記4章15～24節

説教題：主の御手の強さ

はじめに

イスラエルは、約束の地カナンに向かおうとしています。そこに入るためにはまずヨルダン川を渡らなければなりません。ヨシュアは主から強い励ましを受け、川を渡る決断をします。祭司たちは契約の箱をかつぎ、民の先頭に立って進みます。彼らの足が川の水に浸（ひた）ったとき、水はせきとめられ、川底があらわれました。そのところを人々は通り、全員が無事向こう岸へと渡り終えることができました。今日はその続きになります。

## 1 主に従うヨシュア

契約の箱をかついでいる祭司たちは、人々が渡っている間、ずっと川の真ん中に立ち続けています。勝手に動くことは許されません。人々が無事に渡り終えました。そして川の中から十二の石を運び出しました。そのような一連の作業が終わった後、ヨシュアは祭司たちに「ヨルダン川から上がりなさい」と命じます。

ヨシュアの判断で命じたものではありません。15、16節に「主がヨシュアに「あかしの箱をかつぐ祭司たちに命じて、ヨルダン川から上がって来させよ」と仰せられた」とあります。ヨシュアは主のみことばに従っています。

ヨシュアが主に従っていく場面は、今日の箇所ではもう一つ出て来ます。ヨルダン川から取ってきた十二の石を宿営地の真ん中に立てさせ、子どもたちにはこう言って教えな

ければならないと語っています。これも神からの命令です。4章の6、7節と、21、22節に同じようなことばが二度繰り返されていますから、かなり大切な命令のようです。

ヨシュアはこのように神が語ることに忠実に従っていることは間違いありません。なぜそうするのでしょうか。ヨシュアは神を信じていたから。ヨシュアは神によってリーダーとして立てられたから。確かにその通りです。でも、それだけなのでしょうか。

例えば皆さんは、こんなことはないでしょうか。信仰はあると思っているけれども、神に従うことに喜びを感じられない。そういうことはなかったでしょうか。神に従わなければならないことを頭ではわかっていても、どうも乗り気がしない。消極的になる。義務でやっている。極端な例かもしれませんが、神に従うことは日曜日だけ考え、他の六日間は忘れてしまう。そんなふうになった経験はないでしょうか。

神に従うことが喜びと思えるなら幸いです。しかし、そうではないときもあります。いや、喜びがないという方が多いかもしれない。でも聖書を見ると、ヨシュアは喜んで積極的に神に従っている。その違いはどこから来るのか。今日は、そのことにこだわっていきます。

## 2 十二の石

### (1) 子どもたちに伝える

考える糸口として、十二の石に目を留めま

す。神は、ヨルダン川かの川底から十二の部族の数にあわせて十二の石を取るようにと命じました。この石のについてヨシュアはこう語っています。21 から 23 節。「後になって、あなたがたの子どもたちがその父たちに、『これらの石はどういうものなのですか』と聞いたなら、あなたがたは、その子どもたちにこう言って教えなければならぬ。『イスラエルは、このヨルダン川のかわいた土の上を渡ったのだ。』あなたがたの神、主は、あなたがたが渡ってしまうまで、あなたがたの前からヨルダン川の水をからしてくださった。ちょうど、あなたがたの神、主が葦の海になさったのと同じである。それを、私たちが渡り終わってしまうまで、私たちの前からからしてくださった。」

私が生まれ育った田舎では、道のそばに馬頭観音の石が据えてあり、盆の季節になると家族一家がそろってお参りに行ったことを思い出します。昔、どこの家でも農耕馬として馬を飼っていた時代がありました。馬の健康を願うため、馬の守護神である馬頭観音をまつるために石が据えられたと父から聞きました。今は馬を飼う家はありません。馬頭観音と刻んだ石だけ残っております。石を見ることで、後の時代の子どもたちが、かつてこの地域にたくさんの馬がいて働いたのだと知ります。ヨシュアが据えさせた十二の石の役割と共通点があります。

しかし、違うところもあります。日本では石を据えれば、すぐに信仰の対象になります。ろうそくを灯し、線香をたき、お供えをし、石に向かって手を合わせ、拝みます。しかしこの十二の石はそうではありません。あくまでも記念に過ぎません。石を拝むようなことはしません。そこが大きな違いです。

## (2) 伝えることの難しさ

十二の石を据えることで、後の世代の人たちに神の救いの奇蹟が語り継がれていきます。しかし、それはいつまで続くのでしょうか。

先週、東日本大震災から二年になるということで、テレビでいろいろな番組を特集しておりました。そのなかで、津波に襲われたある地域のことが紹介されていました。番組で、そこに住んでいる七十代くらいの方が、津波がどこまで押し寄せてきたのかを語っていました。ふと見ると、その方のすぐ近くに大きな石の塊があるのが見えました。大型ダンブカーほどの大きさでしょうか。男性は、その石を指さしながらこう言いました。「昔からの言い伝えで、この石は津波で海から運ばれてきたと聞いていた。でも、うそだろうと思っていた。だから二年前に津波がこの石のところまで波が来たときは驚いた。」そんなことを言っていました。まわりは大きな木が生えている山です。そんなところにあれほどの大きな岩があれば、素人が見ても奇妙に見えます。そんな大きな石であっても、後の世代に伝えることは難しいのです。年月が経つうちに、忘れられてしまう。そのことを思いました。

ヨシュアは、十二の石を据えて後の世代に語り継ごうと努力しました。今、その石はもうありません。どんなにすばらしい神の奇蹟であろうとも、石によっては伝えきることができません。津波で運ばれてきた石と同じです。では、ヨシュアは無駄なことをしたのでしょうか。そんなことはありません。いまは石ではなく、聖餐式というもつとすばらしい形に変えられ、私たちは毎月一回行っており

ます。

### (3) 目的

でもどうしてヨシュアが十二の石を据えることにこだわるのでしょうか。その理由を、24節で語っています。「それは、地のすべての民が、主の御手の強いことを知り、あなたがたがいつも、あなたがたの神、主を恐れるためである。」

二つ目的があると言っています。一つ目は、地のすべての民が主の御手の強いことを知るため。つまり、信仰を持たない人たちであっても、私たちが信じている神がどれほどの力を持った方であるのか、知らせるため。それが一つ目です。

二つ目は、今度は信仰をもっている私たちのほうに向けられます。私たちが神を恐れるためである。十二の石をわざわざ運ばせたのも、二度にわたって子どもたちに教えなさいと強調したのも、これらの二つの目的のためでした。

皆さんこれを聞いてどう思いますか。何となく理解できるけれど、あまりにも抽象的すぎて、ぴんと来ない。消化しきれない印象があります。

### 3 ラハブのことから主の御手の強いことを知る

ヨシュアはカナンを目の前にしたとき、不安で一杯でした。イスラエルのリーダーにはなったけれど、自分に本当にできるのか。恐怖とプレッシャーの中で震えていました。喜びなどどこにもありません。その彼が今は喜びの中にあります。

もちろん、ヨルダン川を無事に渡り終えたという安堵感もあるでしょう。でも、きつ

けはもっと別の所にあります。ラハブのことです。ヨシュアは、ヨルダン川を渡るとき、前もってエリコの町を偵察させました。戻ってきた偵察隊から報告はこうでした。エリコにはラハブという女性がいます。ラハブは遊女だけれどもイスラエルの神を信じ、イスラエルに救いを求めている。そのよう内容でした。ヨシュアが驚いたのは、ラハブがイスラエルの神を信じたきっかけは何であったのか。その理由を聞いたときです。ラハブは2章10、11節でこう語りました。「あなたがたがエジプトから出て来られたとき、主があなたがたの前で、葦の海の水をからされたこと、また、あなたがたがヨルダン川の向こう側にいたふたりの王、シホンとオグにされたこと、彼らを聖絶したことを、私たちは聞いているからです。私たちは、それを聞いたとき、あなたがたのために、心がしなえて、もうだれにも、勇気がなくなっていました。あなたがたの神、主は、上は天、下は地において神であられるからです。」

ラハブがイスラエルの神を信じる大きなきっかけになったのは、イスラエルがエジプトを脱出するときに主が葦の海をからされた、そのことを聞いたからだと言いました。

ヨシュアは、4章24節で「主の御手の強さ」のことを言っています。主の御手は、異邦人の卑しい職業にあったひとりの女性を救うほどの大きな力をもっています。主の御手がいかに強いものであるのか、ラハブから教えられました。だからヨシュアは積極的なのです。喜んで神のみことばに従おうとしています。ラハブは聞いて信じました。だからヨシュアは伝えることにこだわります。

だれでもそうですが、救いを経験したとき感激します。でも、時間が経つといつの間に

か感激も薄れていきます。自分の救いのことを語る事が少なくなっていく。しかし、私たちの救いの経験が世の人々には大きな影響を与えることを忘れてはなりません。機会があれば、自分が救われたときのことを他の方に伝えます。語る事により、自分の中でもう一度確認する機会となります。聞く方もびっくりした顔をします。その表情を見ることで、主の御手の強さを改めて覚えさせられることとなります。そのとき、私たちは主を恐れ、主に従うことを喜びと感ぜられるようにと変えられていきます。

ヨシュアが据えた石は今はありません。しかし、主イエス・キリストが救って下さったその喜びを伝える私たちの声はこの世に響き渡り、決して止むことはありません。